

ダウンタウン・ボックス

ぼくらの国なんだぜ

ナット・ヘントフ 片桐よう子訳



晶文社



日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

著者について
ナット・ヘントフ

一九二五年、ボストン生まれ。ハーヴァード

メ大学に学ぶ。『ジャズ・レイボーイ』誌の名ジャズ・

で知られる一方、黒人公民

及職運動の行動的理論家と

カー『ヴィレッジ・ウォ

ズ。最近では現代のゆがん

取り組んでいる。『ジャズ・

ヤンコ』にされてもへこた

若い世代にむけた新しい文

多くの読者に親しまれてい

ぎり、ようこ)

まれ。早稲田大学文学部卒

MCA学院講師。

ダウンタウン・ブックス

ぼくらの国^になんだぜ

一九八〇年九月二五日発行

著者 ナット・ヘントフ

訳者 片桐よう子

発行者 株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一一二

電話東京二五五局四五〇一(代表)・四五〇三(編集)

振替東京六一六二七九九

壮光舎印刷・美行製本

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。

△検印廃止V落丁・乱丁本はお取替えいたします。

ぼくらの国なんだぜ

ナット・ヘントフ 片桐よう子訳

ザンタウン・ブックス



晶文社

Nat Hentoff :

IN THE COUNTRY OF OURSELVES

Original Copyright © 1971

by Namar Productions Ltd., New York.

Japanese Copyright © 1980

by Shobun-sha Publisher, Tokyo.

Japanese translation rights arranged through
Orion Press, Tokyo.

あの高校生たちのために。大部分は名前も知らないし、ほんの短い時間会っただけだが、通りすがりに何かをくれていった。あるアングラ紙、そのなかのいくつかの詩、そこに彼らを暗示するものがあった。

ブックデザイン

平野甲賀

しかし このために われわれは旅をつづけた
希望をもって、ひとりぼっちでなく、
われわれ自身の世界を、
かがやく石の国を。

—— シオドア・レトキ『荒涼の国』より

「わたしに憲法を説くのはやめなさい。わたしは、教育委員会の規則と条例を徹底させるためにここにおるのだ。あのバカ新聞の顧問はやめたいだろう。やめなさい」

「いや、いや。やめたくないのですな」

「ま、なにが起こってもわたしは知らんよ。きたないことばはもうたくさんだし、フットボールのコーチがどうかという見出しをつけて毛沢東のいやらしい顔をのせるようなばかげたこともたくさんだ。それから——」

「わかりました。教育委員会マークのついた青と金の楯たてに乗せられて、スカンラン退場というわけですね」

「なんのためにこの頭痛の種をほしがるのかね？」

スカンランは、校長の四角い、しみのある顔を見おろして、にやりとわらった。「教師はつ

ねに学んでいるべきだ——そうですね、ロスブラット先生」

「きみはわざわざいの種だよ、スカンラン先生。きみの筋書きはよくわからん、——が、きみはわざわざいの種だ」

「あなたは経験主義者ですね、ロスブラット先生。先生は人を知りもしないうちに判断するとはなさらないでしょうね」

「絶対にしたくないね。わたしは徹底した経験主義者だ。スカンラン先生、きみとわたしは、おそかれはやかれ、対決することになるだろう」

「先生は早うちですね」

校長は笑った。「いや、ちがう。だましうちの名人だよ、スカンラン君」

スカンランは大げさなおじぎをして、きびすを返し、出た。廊下で「ミス・ジェンスイ」を見かけた。わざわざいの種のことを話そう、あのおどしのことを。この学校で一番の絶対的平和主義者を獲得しよう。しかも彼女は十人並すぐれたところではない。チェ・ゲバラさえふらさせかねないくらいだ。

「非暴力兵士さん、ごきげんはどうかね、ジェイン？」スカンランよ、彼女のからだから目をはなせ。スカンラン、だらしな顔するな。彼女の顔。この顔をたばこの広告に入れろ、そう

したらアメリカ癌協がん会もふきけされてしまうだろう。だが彼女はたばこは吸わない。もちろん吸わない。彼女は何を食ってるのか。わかってます、神様、お助けを、わかってます。

「きみは菜食主義かね、ジェイン？」

「そうあるべきだと思ってます。つまり、筋すぢをとおすべきだってことです」

「そうだ、きみは筋をとおすすめだ」

「クラスでお目にかかります、先生。あの問題ですが、もうできました」

「できたと思ってるんだね」

「いいえ、できたんです」

「よろしい、じゃあ、それをやってみよう」

「だけどあんまり道徳論的にならないようにおねがいます。先生。おもしろいけど話だけじゃなにも成就しませんから」

「よし、わかった、ジェイン。今学期はこの国をひっくりかえしてやろう。四年生はチャンスがあったのに逃した。きみたち三年生がなんとかできるだろうよ」

2

「シュワーツは村八分にしてやるのがいい」ジョシュは言葉を切って、自分がくだした判決を心から支持するように、はつきりとうなずいた。

「村八分って？」デイクはあまりもの知りではない。

「あいつに話しかけない。あいつを認めない。あいつはそこにいないってわけさ」

「どのくらいの期間？」

「言われたことが何でもできるようにするまで」

「こんなこと、全体会議にもち出さなくていいのかい？」

「全体会議は」とジョシュは大げさにがまん強さを見せながら説明した。「規則に基づいて幹部を指名したんだよ、そうだろ？ おれもそうだし、おまえもそうだし、カレンもそうだ」

「カレンはどうか？」デイクがきいた。

ジョシュはからだをのばして後によりかかり、一本の指でサンダンス・キッド風の口ひげをなでた。「女はいいんだ。委任状もらってるよ」にやにやしなながらも一度のびをした。

「おまえは女性差別主義だ、ジョシュ・ブレマー」デイクはおじぎをした。そしてため息をついた。「そういう時代はもう終るんだよ。永久に」

「ひとりひとりについては別だよ」

「今に呼び出しをくうぞ、わかってるくせに。ひとつの考え方で暮していて、別の考え方を実行するなんてできないよ」

「おれがいつ誰に何を強制した？ ふだんの私生活がある点までもってくることはできるよ。」

男性優位がもう存在してるんだ。それをおれから取り去るなんてできないよ」

「それもそうだ。しかし、だからといってわざわざそんな風にふるまうことはないじゃないか。それがやり方ってものだよ。麻酔剤みたいなもんさ。が、きめたんだね、麻酔剤は使わないって。という、ことはだね、個人的生活の方をちゃんとすることじゃないか、そうだろ。それともかげでこそこそしようというのかい」

ジョシュは悲しそうに首をふった。リーダーであることの一番の重荷は、リーダーなんぞに絶対にならないやつらに、そのプロセスを説明することだ。「もちろん、ちがうよ」

「じゃ、おまえの女性に対する態度はどうなんだよ」

「まあ聞けや」ジョシュはデイクに人さし指をつきつけた。「あまりに言行一致していて、欠点のない革命家なんぞ、誰もいっしょに何かしようなんて思わないのさ。お望みならちゃんと書き出してやろうか」

「そんなら、そうしろよ。きびしいジェインのかわい子ちゃんに何かひとことお願いしようか」
「彼女はわれわれ側じゃないよ」ジョシュは顔をしかめた。

「ああ」デイクは勝ちほこったように言った。「革命宣言第一六七八四条を忘れたな——『解放された者たちの言葉だけに耳をかたむける革命家は、自分自身を革命から切りはなしているものである』」

「ちきしょう」

『ふたたびおはようございます。キャンパス開放という方針のもとに、自由クラブはリビングストン・ケイヒルを招いて、来週火曜、午後二時半、北学生ホールにおいて公開の会をひらきます。学生諸君の多数が、自分とまったく反対の政治的考えを知るといふ珍しい経験をするところによって得るところは大と考えます。わたしがみなさんを招待いたします。わたしはみなさ

んに参加をよびかけております。念のため言っておきますが、他人の自由な発言の権利を妨害する者は——特に講師の発言を妨害する場合には——即刻停学にします。以上です』

ジョシュはうなつた。「へい、ロスブラット総統、行きますです。びっくりプレゼントもつてね」

『ブレマー君、きみのコメントはよくきこえなくて残念だが、いつものレベルの高い風刺的分解だと思う』

ジョシュはラウド・スピーカーを見あげて、それにむけてこぶしをふりまわした。

デイブは笑った。「ごめんよ、おれ、あのじいさん好きなんだよ」

ジョシュはおもしろそうな顔などしなかった。「みんな個人的には言うんだ、ジャック・ケネディは男だなんてね。すごーくおかしい。すごーくかしこい。しかしカストロにとってそれはなにを意味していたか？」

「休み時間、終りだよ」